

# かや鮮陽陰、理不の人の

人間国宝の竹本住大夫(90)、竹本源大夫(82)の相次ぐ引退で世代交代が進む文楽太夫界。現在、国立文楽劇場(大阪市)で上演中の名作「奥州安達原」で山場の「一つ家(や)の段」を語るのはベテランの豊竹英大夫(はなぶさだゆう、67)だ。住大夫が得意とした演目で、大阪での上演は24年ぶり。情感たっぷりな老女の残忍さや哀愁を描いた先達に、どこまで迫れるか。

## 表現者 たち

10月下旬、国立文楽劇場の稽古場。畳敷きの部屋に太夫の声と三味線の音色が響く。「ついその腹を、たち割って。ホホホホ」。老女、岩手が実の娘をあやめる凄惨な場面

だ。英大夫は威嚇や恐怖の形相を浮かべ、表情とともに声色を変えながら、登場人物の心情を語る。額から玉の汗が流れる。

「奥州安達原」は時代物の名作で、一族の再興を企てる安倍一族と源氏の駆け引きをドラマチックに描く。一つ家の段は東北地方の鬼女伝説をもとにした。岩手の住むあはら家に、若い夫婦が一夜の宿を求める。岩手は夫を山に誘

打ち立てるのが願ひ。胎児の血は環の宮の病気を治す秘薬として必要だった。

ところが恋絹は自らの実娘と判明。環の宮も偽物で、敵方にはめられたと知る。絶望した岩手は「娘よ……孫よ……しばらく待て」と言い、谷底に身を投げる。後半の山場を英大夫はかすれるような声でたっぷり間をとり、絞り出すように語る。

岩手の正体がわかってからは語りをガラリと変え、老女の失望、後悔、哀愁を巧みに描き出す。前半との対比で、岩手の情の深さが一層引き立つ。「人間には狂気や残酷さが潜む。そういう不条理の世界を伝えたい。岩手の自害で善悪が均衡する救いのある物語。カタルシス(浄化)を感じてほしい」

## 文楽の豊竹英大夫、奥州安達原に挑む



い出し置き去りにした後、臨月の妻に「(胎内の)子が欲しい」と迫る。

「こんなに残酷なシーンは文楽でもまれ」と英大夫。妻の恋絹(こいぎぬ)は「(子どもに)逢(お)うて死にたい」「泣き叫ぶが、岩手は「早う冥土へ遣(や)ってやる」と冷酷に言い放ち、腹を裂いて胎児を引きずり出す。「鬼畜のような行い。単なる悪ではなく、妖怪じみた感じを出すのが重要」

ポイントは岩手のセリフの音の高低だ。例えば、「早う冥土へ」はすこみをきかせた低い声、「遣(や)ってやる」はや高い声で軽く言う。所々微妙に音を上げること、不気味さが生じるという。

ホラーさながらの前半から一転、後半は思わぬ方向に展開する。実は岩手は安倍貞任(あべのさだとう)の母だった。一族再興のため追い剥ぎで軍資金を蓄え、天皇の弟、環(たまき)の宮の新政権を

一つ家の段は近代になって長く上演が途絶えていたが、1973年に住大夫が復活。以後、住大夫と、弟弟子の豊竹咲大夫(70)が主に手がけてきた。今回が初役となる英大夫は本番の1カ月前から2人のテープを聞き込み、咲大夫の教えも請いながら稽古に励んできたという。

大物太夫が相次いで引退し、切り場語り(文楽太夫の最高位)は現在、豊竹嶋大夫(82)と咲大夫だけ。英大夫らのベテラン・中堅が大役を担う機会が一気に増えた。端正な語りを持ち味の英大夫は、「一つ一つの役を自分のものにしていきたい」と力を込める。公演は24日まで。

(大阪・文化担当)

佐々木宇蘭

「奥州安達原」の稽古をする文楽太夫の豊竹英大夫(左)と三味線の鶴澤清介

(大阪市中央区の国立文楽劇場)